

当院の医療環境について

国立精神・神経医療研究センター病院
脳神経内科
勝元敦子

現在勤務している国立精神・神経医療研究センター(National Center of Neurology and Psychiatry; NCNP)病院は、神経・精神・筋疾患の診療を行う専門病院です。2020年から神経内科に勤務していますが、大変働きやすい環境で、忙しくはあるものの、業務を行う上でのストレスはほとんど感じずに日々仕事を行うことができます。このような環境が何によって成り立っているか、気づいた点を挙げて考察してみました。

① 看護スタッフがいつも穏やかで落ち着いている
毎日入退院が多くさらに緊急入院も受け入れている病棟で、忙しさの為にともすれば苛立ったり緊張感がともなうような状況でも、看護スタッフはいつも落ち着いていて、さまざまな事柄に柔軟に対応しています。強制してできることではないので、普段から師長や先輩看護師がそのように実践されてきたのが受け継がれているのだろうと推察しています。われわれ医師も同様に、点滴や処方オーダーを時間までに出すなど病棟内でのルールを守り看護側の負担軽減に配慮することはもちろん、良好なコミュニケーションを意識することが、皆が気持ち良く働く上で重要だと感じました。

② それぞれがプロ意識を持っている

リハビリテーションスタッフ、ソーシャルワーカーなど、各医療スタッフがそれぞれの領域での専門知識を活かして患者介入を行い、医師にフィードバックする体制ができています。特にリハビリテーション科では、入院日にSTが嚥下状態を評価して食形態の変更や嚥下造影検査を勧めたり、PTが肺活量や排痰機能に応じて最大強制吸気量(maximum insufflation capacity; MIC)練習を提案したりなど、

病状観察に基づいた的確な意見を提示していただきます。またソーシャルワーカーは患者家族の介護状況や在宅で必要となり得るサポートなど、医師が気づきにくい問題点を抽出し具体案を提示して下さるので、患者さんにとっても医師にとっても大変心強いです。このように各々がプロとして能動的に考え、医療に取り組む姿勢が相乗効果を生み出していると考えられます。

③ 院内メール

当院の電子カルテには「クジラメール」と呼ばれる連絡システムがあり、スタッフ間での連絡が可能となっています。カルテを開くと画面右上から手紙をくわえた小さなクジラがやって来て、そこで処方の依頼やサマリー提出締め切りのリマインド、グループ間での情報共有など様々な事柄についてのやり取りが行われています。院内PHSでの通話は緊急時や外線など最小限に抑えられ、電話対応で外来診察やカンファレンスが中断することはほとんどありません。またメールとして記録に残るので、依頼事項を後から確認し、スキマ時間に対応することもできます。連絡する側も受ける側も双方にストレスなく、円滑に業務を行う画期的なツールで非常に有用です。

これまで医療スタッフが協議を重ね、長い歴史のなかで現在の職場環境が形作られて来たのでしょう。「NCNPファミリー」として互いを尊重し、それぞれの能力を最大限に発揮できる場があるからこそ、質の高い医療が実現されてると考えており、この素晴らしい環境を今後も守っていきたいと思います。